

「ぞうのババール」と植民地主義 — 『タンタンのコンゴ探検』と比較して—

堀内ゆかり

フランスを代表する絵本「ぞうのババール」シリーズは1931年の出版以来、世界中で読み継がれてきた一方で、人種差別や女性差別、植民地主義、反民主主義的であるという批判がある。しかし実際に作品のどういったところが植民地主義的なのかはそれほど明白ではない。そこで本稿では、同時期に発表された『タンタンのコンゴ探検』を参照基準として、ジャン・ド・ブリュノフ(1899-1937)の「ぞうのババール」シリーズ初期3作にみられる植民地主義について検討し考察する。

I. ババールとタンタン

『ババールのお話』と『タンタンのコンゴ探検』 出版までの経緯

ババールの物語は1930年夏、自然発生的に誕生した。妻セシルが夜、子供に語ったストーリーに想を得て、画家のジャン・ド・ブリュノフが5歳と4歳の息子のために手作りで絵本をつくった。父や兄は出版関係者で、ファッション画や豪華本の出版をしており、ジャンの絵本は1931年『ババールのお話』(*Histoire de Babar*)として父の経営するジャルダン・デ・モード社より刊行された。

同じころ、のちに〈ヨーロッパBDの父〉と称されることになるエルジェ¹(1907-1983)もベルギーで漫画家としてのキャリアを歩みはじめていた。『タンタンのコンゴ探検』(*Tintin au Congo*)は、新聞で連載されたのち、白黒版アル

1 Hergéは本名 Georges Remi (ジョルジュ・レミ)のイニシャルをフランス語読みしたペンネームである。

バムとして出版される。白黒版アルバム刊行までの経緯を確認しておこう。

エルジェは学校卒業後、カトリック保守系新聞社に入り、日刊紙『20世紀』の子供向け週刊付録『プティ20世紀』^{ヴァンティエーム}の編集と連載漫画を担当する。少年記者タンタンが愛犬ミルー²と共に世界各地をめぐる問題解決していくというお決まりの展開は、『プティ20世紀』の専属記者としてこの時から始まったのである。

『タンタン ソビエトへ』に続く、二作目の『タンタンのコンゴ探検』は1930年6月5日号より連載が始まる。コンゴは当時ベルギーの植民地であった。タンタンの取材先としてコンゴが選ばれたのはエルジェ本人の希望ではなく、『20世紀』を発行する出版社の代表で、エルジェのメンター的存在だったワレ神父の意向によるものだった。

『20世紀』紙編集長のノルベール・ワレ神父の考えでは、早急に解決すべきベルギー特有の状況があった。ベルギーの若者たちには、植民地のために働きたいという熱狂が見られない。若者たちに植民地への関心と熱狂を引き起こすために、作者エルジェと主人公タンタンに白羽の矢が立てられたのである³。

このように初期のタンタンの目的地の決定にはワレ神父が関わっていて、一作目は反共産主義の、二作目は植民地主義のプロパガンダ的な側面があった。『タンタンのコンゴ探検』の新聞連載は好評で、1931年に白黒版アルバムが刊行された。

1931年から第二次世界大戦後まで

ジャン・ド・ブリュノフが最初の段階から3部作を構想していたことは、手

2 フランス語版原作ではMilou（ミルー）、英語圏ではSnowy（スノーウィ）。日本語版でもスノーウィという名前が使われている。

3 <https://www.tintin.com/fr/albums/tintin-au-congo>, ワレ神父（1882-1952）はのちに反ユダヤ主義のムッソリーニ支持で対独協力者として投獄されることになる。

「ぞうのババール」と植民地主義—『タンタンのコンゴ探検』と比較して—(堀内ゆかり)

作りの見本版(マケット)を見るとわかる⁴。1931年の *Histoire de Babar* (『ババールのお話』)に続き、1932年に *Le voyage de Babar* (『ババールの旅行』)、1933年の *Le roi Babar* (『王様ババール』)⁵が刊行され、ババールの世界が完結する。その後、ジャンは他に4作品を遺し、第二次大戦前の1937年、結核のため37歳で亡くなる。そのとき12歳だった長男ロランがのちにババールシリーズを引き継ぐことになる。

エルジェについては、『タンタンのコンゴ探検』の白黒版アルバム刊行後の動きを追っておこう。

第二次世界大戦が勃発し、1940年5月、ドイツ軍が降下しベルギーは降伏する。ブリュッセルは占領され、『20世紀』紙は廃刊となった。タンタンの連載は、ナチに接収された『ル・ソワール』紙の子供版『ル・ソワール・ジュネス』に引き継がれる。

大戦中の1942年、カステルマン社がタンタンシリーズをカラー64ページの規格で刊行する方針を決め、エルジェは既刊アルバムの再編・カラー化作業に取りかかる。1944年9月のブリュッセル解放によって『ル・ソワール』紙は発行中止となり、新聞社のメンバーは対独協力者として逮捕、拘留される。エルジェも逮捕されたが、すぐ釈放された⁶。

大戦後の1946年、『タンタンのコンゴ探検』カラー改訂版が他の2冊⁷とともに刊行された。その後、改訂はなされず、現在われわれが読むことのできるのはこの版であり、日本語版もこの版を底本としている。

4 堀内ゆかり、「*Histoire de Babar*『ぞうのババール』をめぐって—ふたつの版、翻訳、教材として—」、『言語・文化・社会』19号、学習院大学外国語教育研究センター、pp.120-147、2021年。

5 日本語版(福音館書店、矢川澄子訳)のタイトルは『ぞうのババール こどものころのおはなし』『ババールのしんこんりょこう』『おうさまババール』。

6 『ユリイカ』特集タンタンの冒険、2011年12月号、青土社、2011年、p.211。

7 『タンタン アメリカへ』(1931年連載開始、1932年アルバム刊行)、『青い蓮』(1934年連載開始、1936年アルバム刊行)

ババールは早い段階で国境を超え、1933年にアメリカで、翌年にはイギリスで『くまのプーさん』の著者A.A.ミルンの序文付きで『ババールのお話』が出版された。本国フランスでは、ババールの絵本は大型版であったこともあり戦後売れ行きが芳しくなかったが、1981年のババール誕生50周年のころから再評価の機運が高まっていく。アメリカではババール作品は古典的作品として定着している。

タンタンに関しては、1952年にカステルマン社が英語圏に参入、その後1959年に訳し直して成功をおさめた。『タンタンのコンゴ探検』の白黒版(1930年)は、長いあいだ読むことができなかったが、フランスでマニア向けの大型本『アーカイブ』として1973年になって刊行された。本稿で論じている『タンタンのコンゴ探検』の改訂版を含め、カステルマン社刊のタンタンシリーズ全24巻は現在、電子版でも読むことができる。

II. 植民地主義のあらわれ

『タンタンのコンゴ探検』 白黒版(1930年)から改訂版(1946年)へ

タンタンシリーズの改訂が行われ、白黒版では3段組み、『アーカイブ』に再録された際は実質109ページ⁸あったのが、1946年版ではカラー4段組み64ページとなる。カラー化とページ数の削減のほか、内容にも手が加えられている。

改訂版の刊行は第二次大戦終結直後(1946年)であり、コンゴは独立(1960年)前でベルギーの植民地であった。植民地主義の顕揚を目的としていた白黒版と比較すると1946年版はトーンダウンしているとはいえ、植民地主義的である。どのような改変がなされたのかを、絵と文の両方から見ておこう。

主な相違点として、まず、タンタンの身分の違いがある。冒頭、1930年版ではタンタンは「コンゴに出発する〈プチ20世記〉の記者⁹」として登場するが、

8 Hergé, *Tintin au Congo (1930)* in *Archive Hergé, Tome I*, Casterman, 1973, pp. 184-293.

9 “Qui est-ce ?” “C’est monsieur Tintin, le reporter du Petit Vingtième qui part pour le Congo.” (1930, p.184)
この版では原文はすべて大文字、以下同。

1946年版では単に「アフリカにでかける少年記者¹⁰」に変わる。『プチ 20 世紀』紙から派遣された専属の新聞記者であるという設定から、単なる「少年記者」となる。目的地については、タイトルこそ *Tintin au Congo* のままだが、改訂版の本文中ではコンゴではなくすべて「アフリカ」に置き換えられている。

タンタンが訪問先の小学校で先生役をつとめることになったとき、1930年版では神父から「遠くはなれた我らがベルギーについて」話すよう促されて、タンタンは言う。「生徒のみなさん、きょうはみなさんの祖国ベルギーのことをお話ししましょう¹¹」。それが1946年版ではタンタンの教える科目は「算数」に変わり、「2 たす 2」を教えている。

また、1930年版の駅の場面では、「駅長」を意味する言葉がフランス語 (CHEF DE STATION) とオランダ語 (STATIOVERSTE) で併記されている。駅名などのフランス語とオランダ語の併記はベルギーの首都ブリュッセルでよく見られ、これだけでベルギーという国が想起されるが、1946年版ではフランス語のみに変更されている。

ほかにも、タンタンの活躍を伝える新聞各紙が重ねられているコマでは、1930年版では新聞の見出しや記事のなかに Colonie (植民地)、diam (ダイヤモンド) という文字が読み取れる¹²が、1946年版ではそれらの文字は読み取れないような配置に変更されている。

ここに挙げた改変にはいずれも、ベルギーの固有性や、植民地コンゴの宗主国はベルギーであるという事実を曖昧にしようという意図が感じられる。

狩猟・象・牙

狩猟のテーマは、タンタンがアフリカに向かう船内から見られる。犬のミルーが大きな弾丸を見つける場面である。1930年版、1946年版ともに、背景には

10 “Il paraît que c’est un jeune reporter qui part pour l’Afrique.” (1946, p.1)

11 “Voilà votre classe, Vous pourriez leur parler de notre lointaine Belgique.” “Mes chers amis, je vais vous parler aujourd’hui de votre patrie : La Belgique!...” (1930, p.247) 1930年版の訳は筆者による。

12 1930, p.275. 1946, p.53.

銃が立てかけられている。1930年版では、ピスヘルメット〔探検帽〕をかぶった犬のミルーが、弾丸を持って言う。「なんて大きな弾丸だ。きっと象狩りに使うのだろう¹³」。それが1946年版では「きっとライオン狩りに使うんだ¹⁴」となり、狩りの対象が象からライオンに変わり、ミルーは探検帽をかぶっていない。

アフリカ大陸到着の翌朝、タンタンはサファリジャケットに身をつつみ、黒人少年ココを助手にしてジープで出発する。「ここでまってて ココ ぼくは獲物をさがしてくる」「夕飯はぼくにまかせて」¹⁵。食糧獲得のための狩猟で、タンタンはまず15頭のアンテロープしとめる。ほかに、ワニ、猿、へびなど、次々と動物を撃っていく。

ぞう狩りは、こうした食糧獲得を目的とする狩りとは異なる。小学校で授業をしたあと、そのお礼としてタンタンは神父にぞう狩りに誘われる。「明日はゾウ狩りに招待しよう。エキサイトするよ きっと¹⁶」。エキサイトする (passionante) という言葉から、娯楽やスポーツ感覚であることがわかる。案内人¹⁷も同行する本格的な遊猟である。タンタンはぞうを銃で狙うがタマがはねかえって失敗する。さるが銃を持ってあそんでいると、銃が暴発し、ぞうが倒れる。

「ぼくのぞうが…死んでる¹⁸」、ぞうが倒れた場面に続いてタンタンが象牙を担いでいる場面があり、1930年版では「明け方、タンタンは貴重な象牙を取り出し、伝道所へ持ち帰る¹⁹」というト書きが添えられている。1946年版では、絵は同じ

13 “Quelles grosses cartouches !...Ce doit être certainement pour chasser l’éléphant !” (1930, p.185)

14 “Diable ! quelle grosses cartouches ! C’est sûrement pour chasser le lion, ça...” (1946, p. 日本語版, p.2)
1946年版の訳は日本語版の川口恵子訳を使わせていただいた。

15 “Je vais voir s’il y a du gibier...” (1946, 日本語版, p.12) “Et maintenant, Coco, tu vas dresser la tente et allumer le feu. Moi, je vais m’occuper du dîner.” (1946, 日本語版, p.15)

16 “Je vous invite à une chasse à l’éléphant qui promet d’être passionnante.” (1930, p.250, 1946, 日本語版, p.38)

17 rabatteur (1946, 日本語版 p.38) , pisteur (1930, p.250)

18 Mon éléphant ! Mort ! (1946, 日本語版 p.42, 1930, p.255)

19 Au petit jour, Tintin reprend le chemin de la mission non sans avoir enlevé les précieuses défenses de l’éléphant. (1930, p.255)

「ぞうのババル」と植民地主義—『タンタンのコンゴ探検』と比較して—(堀内ゆかり)

だが、象牙についての言及はなく、ト書きは「何時間かして…(数時間後)²⁰」のみに変えられている。

タンタンが意図的にぞうを撃ったのではないにしろ、暴発した弾が当たって死んでしまった。もったいないから象牙はもらっておこう、という展開である。しかし直後にタンタンは暴漢に襲われ、象牙を手放し、その後、物語に象牙は出てこない。

タンタン自身がハンターとなって狩りをする姿は、いまのわれわれの感覚からすると違和感がある。銃撃の瞬間、ミラーに「こんな殺戮場面は見えてられない」²¹と言わせているのは、エルジェのバランス感覚だろうか。

つぎにババルの物語におけるハンターの場面を見てみよう。

ハンターがぞうを撃ち殺す場面は、ババルの物語の根幹をなしている。殺されたのはババルの母親であり、それゆえババルは孤児となり、ババルの物語がはじまっていく。

『ババルのお話』(1931)では、1ページ目でババルの誕生が語られ、つづく見開きで仔象たちと遊ぶ場面があり、実質4ページ目でハンターが登場する。

「ババルはママの背に乗り、楽しく散歩しています。そのとき、悪いハンターが、茂みの後ろに隠れていて、彼らに向けて発砲します」²² (p.10)

「ハンターはババルのママを殺しました。さるはかくれ、鳥は飛び立ちます。ハンターはババルをつかまえようと、かけよります」²³ (p.11)

20 Quelques heures plus tard... (1946, 日本語版 p.42)

21 “Je ne supporte pas ces scènes de carnage...” (1946, p.38)「残酷シーンはきらいです」(日本語版, p.38)
“Je ne peux pas voir ces scènes de carnage!” (1930, p.251)

22 Babar se promène très heureux / sur le dos de sa maman, / quand un vilain chasseur, / chaché derrière un buisson, / tire sur eux. 訳は筆者による。

23 Le chasseur a tué la maman. / Le singe se cache, les oiseaux s’envolent, / Babar pleure. / Le chasseur court

見開き2ページを使って、発砲される前と後が示されている。左ページではババル母子に向けて、銃を構えて発砲するハンターの後ろ姿が描かれ、右ページでは倒れた母ぞうと涙を流すババル、そこに駆け寄るハンターが描かれている。ハンターはベージュ色の服にブーツ、ヘルメットをかぶっていて顔は見えない。つづくページでババルはハンターから逃げ、数日間歩きつづけ、ヨーロッパ風の都会にたどりつく。

『ババルのお話』では、〈悪いハンター〉としか書かれていない。ハンターの目的は何だったのか。母ぞうを撃ったあと、なぜ仔象のババルを追いかけたのだろうか。説明は一切ない。

また、象牙について注目してみると、奇妙な点に気づく。ババルの牙は、大人になっても短いままなのだ。ほかのぞうたちの牙は子供のときは小さく、大人になると鼻の半分の長さ、長老たちは鼻の3分の2ほどの長さがあるが、ババルと王妃セレストの牙は短い。ぞうの姿のまま、二足歩行で服を着せて人間らしく見せる作画上の事情もあるだろうが、それに加え、象牙の存在に読者の意識を向けさせないようにという配慮もあるのではないか。ババルのいとこの男児アルチュールは、裸のぞうのときは小さな牙があるが、街に出てきて服を着るようになると牙は描かれなくなる²⁴。

原住民の描かれ方

『タンタンのコンゴ探検』における現地の村人と、『ババルの旅』における島の住人の姿には類似が見られる。

ババルは気球に乗って新婚旅行に出かけるが、嵐に巻き込まれ、気球は島に漂着する。そこへ島の住人、「獐猛な人喰いの野蛮人²⁵」が現れる。黒い肌に赤い厚い唇、丸い目、上半身は裸で腰囊をつけ、手には盾や槍を持っている。

『タンタンのコンゴ探検』にはさまざまな身分の現地人が登場するが、村人は、

pour attraper / le pauvre Babar. 訳は筆者による。

24 Isabelle Nières-Chevrel, *Au pays de Babar*, Presse universitaires de Rennes, 2017, p.67, note 24.

25 de féroces sauvages cannibales

『パバルの旅行』における「野蛮人」同様、黒い肌に赤い厚い唇、丸い目、上半身は裸で、手には盾や槍を持っており、異なるのは腰蓑ではなく腰布をまとっている点のみである。

ジャン・ド・ブリュノフとエルジェの描く黒人像は、なぜ、これほどまでに類似しているのか。これらの描写はどこかコミカルな要素も感じられ、『ちびくろ・さんぼ²⁶』の絵に通じるものがある。これが当時の西洋人がもつ黒人の誇張された類型的なイメージだったと言えるのではないか。

「人喰いの獐猛な野蛮人」の「カニバル（人喰い、共喰い）」については次章で扱うが、その前に物語の展開を確認しておこう。パバルとセレストが島に漂着し、パバルはあたりの探検に出かけ、セレストが昼寝をしていると原住民が現れ、セレストを見つけて言う。「なんて大きな動物だ。こんなのは見たことない。肉はうまそうだ²⁷。原住民にとってセレストは共食い（人喰い）の対象である人間ではなく、動物（bête）として認識されている。彼らは寝ているセレストをロープで縛り上げるが、危機一髪のところパバルが戻ってきてセレストを救い、二頭は彼らをやっつける。「この大きな動物はとんでもなく強いな。それに皮が厚い！」と言いながら原住民たちは逃げていく。

『タンタンのコンゴ探検』では他にも露骨な黒人蔑視が見られ、敬称の Monsieur ムッシュを「ムッシュ²⁸」とアフリカなまりで言ったり、「帰るダメ！ パバオロムのところ行く²⁹」などと片言で話す。タンタンは彼らに対し、「わっ、こどもじゃない、ピグミーのおじいさん！³⁰」と言って驚いたり、怠けてすぐさぼろうとする彼らを責め立てる。「さあ はたらいて！」「はたらく つかれる」「さっさと仕事する！ ほら こんな犬がひとりや やってんですよ³¹」。

26 ヘレン・バンナーマン原作、フランク・トビアス絵(1927)年の岩波書店版。1988年に絶版となった。

27 *Le voyage de Babar*, pp.12-17.

28 Bien, missié. (1930, p.202, 1946, p.12)「あい、ムッシュ」(日本語版 p.12)

29 Toi pas partir !... Toi y en venir avec nous chez les Babaoro'm ! (1930 p.218, 1946, 日本語版 p.21)

30 Sapisiti ! Ce n'est pas un enfant !... C'est un vieux pygmée ! (1946, 日本語版 p.49) ? Ce n'est pas un gosse !... C'est un vieux pygmée ! (1930 p.266)

31 Allons, au travail ! Moi y en a fatigué!

III. 時代背景と批判

1931年の国際植民地博覧会

『パパールのお話』と『タンタンのコンゴ探検』が出版された1931年は、パリで国際植民地博覧会が開催された年でもあった。

万国博覧会というものの自体は1851年にロンドンで始まるが、その起源はフランス革命後の工業製品展示会にさかのぼる。それが国内規模の産業博覧会から世界的規模の博覧会へと発展していった³²。1928年に「国際博覧会に関するパリ条約」が制定され、現代も各国で開催されている³³。

国際植民地博覧会は1931年5月6日から11月15日まで、パリ東部ヴァンセンヌの森で開催された。会場のあるポルトドレ駅まで地下鉄が延長工事され、ポルトドレに植民地常設博物館の建設された。アメリカ合衆国、イタリア、ベルギー、オランダ、ポルトガル、デンマークが参加し、列強諸国それぞれのパピリオンの建設された。カンボジアのアンコール・ワット寺院の実物大での復元や動物園の設置のほか、会場にはアンナンの踊り子、再現されたセネガル村のアフリカ人家族や職人、アラブ人の騎兵など、数千人の「原住民」も登場した。観客数800万人（外国人の割合は15パーセント）と言われている。20世紀フランスの最大のイベントの一つであり、帝国のプロパガンダの到達点であった³⁴。1931年1月1日付広報紙 *Le Journal de l'Exposition coloniale*³⁵ や会場の地図³⁶ から、当時の様子を知ることができる。

Au travail, vite...Vous n'avez pas honte de laisser ce chien travailler tout seul ?.... (1930 p.216, 1946, 日本語版 p.20)

32 福井憲彦・監修、伊藤真実子、村松弘一・編『世界の蒐集 アジアをめぐる博物館・博覧会・海外旅行』、山川出版社、2014年、pp.230-231。

33 主な博覧会年表 <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/tenjikai2003/chrono.html>

34 労働総同盟とシュールレアリストによる対抗展示会も開催され、5000人が訪れた。N.バンセルほか著・平野千果子ほか訳『植民地共和国フランス』、岩波書店、2011年、pp.135-142。

35 <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k936142n>

36 <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84590341.r>

植民地帝国の宣伝とともに、異国住民に関する主要なステレオタイプが普及し、さまざまなメディアに登場するようになった。植民地の拡大とともに、他者は西洋外部の人びとを指すようになり、「エギゾチック」で「コロニアル」な存在として表象されるようになった。かつての「善良なる未開人」の表象は、「動物的な野蛮人」へと逆転した³⁷。こうした背景から、国際植民地博覧会会場で「原住民」が展示された。しかし、「人喰い人種カナク」の常設展を設けることについては総局長のリヨテ元帥が反対した。「文明化の使命」によってもたらされる「進歩」のイメージが損なわれるからである³⁸。

その結果、ニューカレドニアから植民地博覧会に参加するために呼び寄せられた約 100 名のカナクは、パリ東部の国際植民地博覧会ではなく、パリ西部ブローニュの森にある順化園 (le Jardin d'acclimatation) で紹介されることとなった。以前にもカナクはパリに来ており、〈人喰い人種カナク〉という神話がフランスで根付いており、現代の植民地のプロパガンダとしてふさわしくないと判断されたのである³⁹。

ババール作品への批判

これまで見てきたように『タンタンのコンゴ探検』における植民地主義は明白で露骨であり、批判の対象となることは理解できる。

「ババール」への批判では、どんな指摘がなされているのだろうか。ここでは、3 人の英語圏の批判家の見解を紹介する。

アメリカ人の教育者ハーバート・コールによる『ババールを燃やすべきか?』(Should we burn Babar?) は 1995 年に刊行され 2007 年に再版されている。この本の表紙は、ババールと同じく黄色い王冠に緑色の服を来た象が真っ逆さまに落下し、服から燃えている絵である。この絵とタイトルはセンセーショナル

37 N. バンセルほか著・平野千果子ほか訳、「植民地共和国フランス」、p.121

38 *ibid.*, p.141-142

39 サッカー元フランス代表のクリスティアン・カランプール選手の曾祖父もこれに含まれる。ディディエ・デナンクスの小説『カニバル』[高橋啓訳、青土社]にも書かれている。

だが、実際は著者の個人的な見解を語るエッセイで、「ババールを燃やすべきか？」という問いへの答えを結論部でこう書いている。「私はババールを禁止したり、燃やしたり、図書館から撤去したりしない。でも、買うのは？ わざわざ『ババール』を買わなくてもいいのではないかと思う。なぜなら、学校では批判的な読書クリティカルリーディングがあまり行われておらず、子供たちは植民地主義や性差別、人種差別についてプロパガンダ教育を受けるべきではないからだ」。そのあとに、こう続く。「私の妻はそう思っていない。妻は私よりも、子供たちが人の手を借りずに批判的な感性を育む能力に確信を持っており、孫のためにこの本を買うかもしれない」。

このように、「ババールを燃やすべきか？」という挑発的なタイトルに反してコールの主張は歯切れがよくない。こうした曖昧さは、ババール批判を検証しようとするときにつねにつきまとう。ババール生誕 80 周年を記念するババール原画展のカタログ⁴⁰のなかで、カーリーヌ・ピコーはこう指摘する。「ババールのなかに、植民地主義の擁護を見てとる批評家もいれば、反対に、フランス人の植民地幻想の風刺を見てとる批評家もいる」⁴¹。前者の例としてアリエル・ドルフマン⁴²、後者の例としてアダム・ゴプニク⁴³の名を挙げている。

アリエル・ドルフマンはチリ出身、アメリカ在住の文学研究者・作家で、『子どものメディアを読む』⁴⁴の第1章「象とアヒルの物語」でババールを論じている。

ドルフマンによれば⁴⁵、資本主義の国では児童文学は一つの機能を持っている。

40 *Les Histoires de Babar*, Sous la direction de Dorothee Charles, 2011.

41 Carine Picaud, Babar en famille, *Les Histoires de Babar*, op.cit., p.29.

42 Ariel Dorfman, cité par Annie Pissard, «Vive Babar !», *La Revue des livres pour enfants* n°81-82, décembre 1981, p.26-30.

43 Adam Gopnik, «Freeing the elephants», *The New Yorker*, september 22, 2008

44 アリエル・ドルフマン、諸岡敏行訳『子どものメディアを読む』、晶文社、1992年。Ariel Dorfman, *The Empire's Old Clothes*, Pantheon Books, New York, 1983 (2nd edition 2010)

45 「ババール万歳！」にアニー・ピサールによる要約がある。

Annie Pissard, «Vive Babar !», *La Revue des livres pour enfants* n°81-82, décembre 1981, p.26-30.

https://cnlj.bnf.fr/sites/default/files/revues_document_joint/PUBLICATION_2660.pdf

とるべき行動のモデルを示し、現行の権力を強化する視点を示すことによって、子どもたちにイデオロギー的な答えを与えることである。この点においてババルのストーリーは明白である。この小さな象は小さな野蛮人であり（ドルフマンは Babar という名に Barbare [未開の] との関連を見てとる）、自然な姿の子ぞうは人間文明のおかげで、ぞうの王様となり、国を救い、国を「近代」国家に変える。裸だったババルは服を着るようになるが、未開人に服を着せるのは常に、植民者の最初の行為である。ババルは四足歩行から二足歩行になり、〈ぞうの外見のまま〉人間になる。食卓ではナプキンを使い、浴槽に入る。学習して、従順で知的で、大きな大人になる。ババルを読む子どもは、同時に「歴史・物語」を学ぶのである。

「同化せよ」。これが影のメッセージである。「わるいハンター」があらわれて、ババルの母親を殺したとき、この未開の楽園は終わりを告げる。このむごいしうちは大きなプラスの結果をもたらすことになる。おばあさんと知り合うからだ。ババルの「向上」[プロGRESS]とは身なりをよくすることだ。街に出てきたいとこたちも服を着て、一緒に自動車で国に帰ることになる。

ドルフマンのババル批判は、物語の本質的な構造についての指摘であり、それが読者には受け入れにくいものであることもドルフマンは了解済みである。ドルフマンは書く一この本の目的は、「客観的な、いじわるなどいい視線を投げかけて」、絵本のなかから「そこに隠された社会的、政治的な意味」を洗いたてることである。これはつらい仕事になるだろう。着なれた衣服を脱ぎすてるのは、着心地がよくて、いい思い出が多いほど容易なことではないからだ。これがこの本の原題 *The Empires's old colthes* (帝国の古い衣服) に込められた意味でもある。

一方、モーガン・ライブラリーにおけるババル原画展の開催⁴⁶に合わせて2008年に『ニューヨーカー』誌の美術文芸欄に掲載された論考でアダム・ゴブニックは、上述のドルフマンの「驚くほど澁刺としたヒドラの頭のような」[多

46 Drawing Babar: Early Drafts and Watercolors.

面的な] 論法」を評価しながらも、ババールのシンプルな絵、とくに結婚式の晩の後ろ姿と、ぞうの国の街並みを取り上げ、「フランスのブルジョワの秩序ある生活を愛情を込めてパロディ化している」と主張し、「植民地主義の寓話というよりも、ブルジョワの生活の難しさを寓話化したものである」と結論づけている。

これからの課題

両大戦間に刊行された子供向けの本のなかで、イデオロギーに重きを置いた多くの本は消え、本質的な文学的、美的価値によってタンタンとババールだけが残った。

ババールは植民地主義的なのか？ ストーリー展開に関しては、ハンターがババールの母親を撃つことがなければ、ババールの物語は成立しない。また、この物語の発端となった、妻セシルが息子たちに語った話については、実際に外交官夫人としてベルギー領コンゴやケニアに滞在したジャンの叔母がいて、叔母から聞いた話がふとセシルの頭に浮かんだのだらうと言われている⁴⁷。この点でも、ババールの物語は植民地がなければ生まれなかったのであり、まさしく植民地主義の副産物なのである。

しかし『タンタンのコンゴ探検』とは異なり、ババールの物語では、アフリカやパリといった実在の地名は一切、示されていないのはなぜなのか。

象の国はアフリカをあらわしている。あからさまに示さなくても、名前を直接ださなくても、なんとも痛ましいほどにいいあてることができる。ジャン・ド・ブリュノフには、冒険の舞台となる国々を笑いものにしないだけの分別があった。あるいはもっと深いものがあったのかもしれない。何世紀ものあいだ、植民地をひらいてきた実績のある国の一員だという自負心がそうだ⁴⁸。

47 *Les Histoires de Babar*, op.cit., p.44.

48 ドルフマン『子供のメディアを読む』, op.cit. pp.34-35

ドルフマンのいう「分別」のある物語のなかで、2章で取り上げた「獐猛な人喰いの野蛮人」は、唐突で差別的であるように感じられる。フランスの過去(1981年、1985年、1991年)の版では息子ロランの依頼によりこの場面が削除されたこともあった⁴⁹が、現在の版は、絵も手書き文字も初版と同じである。日本語版の矢川澄子訳では、「獐猛な人喰いの野蛮人」、「人喰い人種」は、それぞれ「げんじゅうみんなち」、「おとこたち」に書き換えられている。子供が読者の場合は、偏見を助長しないためにもこうした書き換えが必要なこともあるだろう。しかし同時に、書き換えによって隠れてしまう問題もあることを指摘しておきたい。「獐猛な人喰いの野蛮人」という表現から、われわれは植民地主義、人種差別を身近な問題として学ぶことができる。

1931年の国際植民地博覧会では植民地から集められた「原住民」たちが展示された。当時の人々にとっては、それが当たり前のことだった。2011年になってようやく、ケ・ブランリ美術館で「Exhibitions 野蛮の発明」展が開催される。展示会のタイトル Exhibitions には、「展示」だけでなく、「見せびらかす」、「見せものにする」という意味も込められている。企画者のひとり、パスカル・ブランシャールはカタログの序文にこう記している——西洋は〈野蛮〉をでっちあげた。それは巨大はスペクタクルであり [...] それは忘れられた歴史であり、それは植民地の歴史と、科学の歴史、見せ物の歴史、万国博覧会の歴史の交差点にある⁵⁰。

同展示会のプレゼンターをつとめ、反人種差別の教育活動もしているグループ出身のサッカー選手リリアン・テュラム⁵¹の言葉を引用して、むすびとしたい。

49 *Les Histoires de Babar*, op.cit., p.111.

50 *Exhibitions L'invention du sauvage*, sous la direction de Pascal Blanchard, Présentation de Lilian Thuram, Actes Sud, musée du quai Branly, 2011, p.16

51 <https://www.thuram.org> Fondation Lilian Thuram, Education contre le racisme

かつて〈野蛮人をでっちあげた〉こうした像は、今日、ある人々は他の人々より優れていると思込ませようとする思考回路を解体するためにこそ、役立てられなければならない⁵²。

参考文献

Archive Hergé, Tome I, Totor, C.P. des Hannetons, et les versions originales des albums Tintin, Tintin au pays des soviets (1929), au Congo (1930), en Amérique (1931), Casterman, 1973.

「タンタンの冒険」電子書籍、<https://www.tintin.com/fr/albums>

エルジェ作、川口恵子訳『タンタンのコンゴ探検』、福音館、2007年。

Jean de Brunhoff, *Histoire de Babar*, Librairie Hachette, l'école des loisirs, 1979

Jean de Brunhoff, *Le voyage de Babar*, Librairie Hachette, l'école des loisirs, 1979

Herbert Kohl, *Should we burn Babar ? Essays on Children's Literature and the Power of Stories*, 1995, 2007. The New Press.

Annie Pissard, « Vive Babar ! », *La Revue des livres pour enfants* n°s 81-82, décembre 1981, p.26-30. https://cnlj.bnf.fr/sites/default/files/revues_document_joint/PUBLICATION_2660.pdf

Adam Gopnik, « Freeing the elephants », *The New Yorker*, september 22, 2008.

<https://www.newyorker.com/magazine/2008/09/22/freeing-the-elephants>

Les Histoires de Babar, Sous la direction de Dorothee Charles, 2011.

Isabelle Nières-Chevrel, *Au pays de Babar*, Presse universitaires de Rennes, 2017.

Exibitions L'invention du sauvage, sous la direction de Pascal Blanchard, Gilles Boëtsch et Nanette joomijn Snoep, Présentation de Lilian Thuram, Acte sud, 2011

『ユリイカ』特集タンタンの冒険、2011年12月号、青土社、2011年。

「ちびくろサンボ」問題を考える—シンポジウム記録、日本図書館協会、1980年。

52 *Exibitions L'invention du sauvage*, op.cit., p.15.

「ぞうのパパール」と植民地主義—『タンタンのコンゴ探検』と比較して—(堀内ゆかり)

日本図書館協会「図書館雑誌」[特集] 再び「ちびくろサンボ」問題を考える、
vol.85, No.5, 1991年5月。

福井憲彦・監修、伊藤真実子、村松弘一・編『世界の蒐集 アジアをめぐる博物館・博覧会・海外旅行』、山川出版社、2014年。

N. バンセルほか著・平野千果子ほか訳「植民地共和国フランス」、岩波書店、
2011年(原書は2003年)。

アリエル・ドルフマン、諸岡敏行訳『子どものメディアを読む』、晶文社、1992年。
(原書は Ariel Dorfman, *The Empire's Old clothes*, Random House, Inc. New York,
1983.)

Babar et la culture coloniale

HORIUCHI Yukari

Babar est-il colonialiste? La réponse est ambiguë : “Certains critiques ont vu dans Babar une apologie du colonialisme, d’autres au contraire une satire de l’imaginaire colonial français.” (Carine Picaud).

Pour répondre à cette question, nous avons choisi de prendre Tintin (*Tintin au Congo*) pour critère, dont le colonialisme est explicite, évident et même exagéré. C’est à la demande de son mentor, l’abbé Wallez, directeur du *Vingtième Siècle* qu’Hergé a dessiné *Tintin au Congo* pour “susciter de l’enthousiasme des jeunes Belges”.

Dans cet article, d’abord nous examinons de plus près les deux versions de *Tintin au Congo* : la version noir et blanc publiée en 1930 dans le petit *Vingtième*, reproduite dans *Archive Hergé* et celle en couleur Casterman publiée en 1946, qui est la version actuelle. Ensuite, nous discutons quelques motifs communs à la trilogie Babar (*Histoire de Babar, le voyage de Babar et le roi Babar*) et à *Tintin au Congo* : la chasse, les éléphants (leurs défenses) ainsi que la description des indigènes.

Pour conclure, nous situons ces œuvres dans le temps. Elles ont été publiées dans l’entre-deux-guerres et, 1931, année où paraît Babar, est celle de l’Exposition coloniale de Paris. Tintin et Babar, ces deux héros ont survécu grâce à leurs qualités littéraires et esthétiques.